

# 古代の東アジアと京都盆地

上田 正昭

## 1. 『新撰姓氏録』の左京・右京の「諸蕃」

『新撰姓氏録』の完成がいつであったか。これまでもいろいろと議論されてきた。それは『日本紀略』には、弘仁5年(814)6月1日の条に、「中務卿四品萬多親王、右大臣従二位藤原朝臣園人等、勅を奉りて姓氏録を撰す。是に至りて成る」と記し、他方『新撰姓氏録』の上表文には、弘仁6年7月20日に上表したと述べているからである。諸説があったが、現在では弘仁5年6月1日に完成したけれども、記事の増補や改訂がなされて、翌年の7月20日に再上表されたとみなすのが通説となっている。したがって『新撰姓氏録』の完成は弘仁6年であったとみなしてよい。

氏族の系譜の集成は、天平宝字5年(761)に『氏族志』の編纂が計画されたが、恵美押勝(藤原仲麻呂)の乱などのために中絶し、桓武天皇の延暦18年(799)に各氏族に対して本系帳の提出を命じ、氏族の系譜の撰録事業がはじまったが、桓武天皇の崩去によって、嵯峨天皇がその事業を継承することになる。こうして「平安京の左京・右京」、山城国、大和国、攝津国、河内国、和泉国の順に平安京を含む5畿内1182氏の出自の系譜ができあがった。出自によって皇別・神別・諸蕃に分けて記載し、最後に未定雑姓(系譜未詳の氏族)を掲載した。1182氏の内訳は、左京・右京から和泉国までで、皇別335氏・神別404氏・諸蕃326氏・未定雑姓117氏となっている。

渡来系の氏族の諸蕃がかなりの数を占めるが、それは平安京においてなおいちじるしい。平安京の左京皇別は118氏であり、右京皇別は67氏であって、左京・右京皇別の合計は185氏となる。左京神別は82氏であり、右京神別は65氏であって、その合計は147氏であった。ところが左京諸蕃は62氏、右京諸蕃は102氏で、その合計164氏は、左京と右京の神別氏族の合計を抜いている。いかに平安京に渡来系の氏族が多数居住していたかをうかがうことができる。

『新撰姓氏録』には「逸文」がかなりあり、その内容にも曾孫を四世孫とする場合や玄孫を四世孫と書いたり、同神あるいは同一人物が違った文字で書かれている場合など、その内容のすべてを信頼するわけにはいかないけれども(佐伯有清『新撰姓氏録』研究篇、吉川弘文館)、そのおよそのありようをうかがうことは可能である。

『新撰姓氏録』の「諸蕃」では「漢」・「百濟」・「高麗」にわけているが、たとえば「左京諸蕃上」の冒頭には、「太秦公宿禰 秦始皇帝の十三世の孫、孝武王の後なり」とする。これは中国を「大唐」として、新羅系の秦氏の始祖を秦始皇帝に付会したものであって、もとより信頼することはできない。「大宝令」や「養老令」の公文書の様式などを定めた「公式令」の注釋書で、天平10年(738)ごろの『古記』に、「隣国は大唐」、「蕃国は新羅」とみなした中華を敬慕しての始祖の改変であった。したがって「漢」の分類のなかには新羅系の渡来氏族もかなり含まれている。

アジア大陸の東に位置する弧状の日本列島には、中国や南海の掖玖(屋久島)などからも渡来してきた人びとも多くいるが、渡来系氏族を代表するのは朝鮮半島から渡来してきた高麗(貊)氏・漢氏(中国の漢人ではない)、そして秦氏である。高麗氏のふるさとが朝鮮半島北部の高句麗であることは、『日本書紀』神功皇后攝政前紀や應神天皇7年9月の条をはじめとし、すべて「高麗」と記し、『続日本紀』が同様に和銅4年12月の条ほかでやはり「高麗」と書いているのをみてもわかる。前述した『新撰姓氏録』においても高句麗を「高麗」と表記し、「未定雑姓」の河内国狛染部や同狛人について「高麗国の須牟祁王の後」と明記しているのをみても明らかである。高句麗の長壽王が414年に先帝の好太王(広開土王)の功績をたたえて建立した広開土王陵碑にみえる鄒牟王が須牟祁王である。1145年に高麗の史家金富軾がまとめた『三国史記』の高句麗本紀・始祖の条に「東明聖王」とし「諱は朱蒙」「一に云はく鄒牟、一に云はく衆解」とあり、同書の百濟本紀・始祖の条に「鄒牟或は朱蒙」とみえる建国の始祖とされる人物である。韓国ドラマ「朱蒙」で多くの人びとに知られるようになった。

ついでながらいえば、高句麗と百濟の建国の始祖は同一人物であり、『新撰姓氏録』の「左京諸蕃下」の百濟の和朝臣の条にみえる「百濟国の都慕王の十八世の孫、武寧王より出づ」などの都慕王とは高句麗の建国神話の始祖鄒牟王のことであった(後述参照)。問題は漢氏のふるさとである。漢氏では生駒・金剛山脈の東側、奈良県明日香村の<sup>ひのくま</sup>檜前を中心とする<sup>やまとの</sup>東漢氏と、その反対の西側の河内に分布する<sup>かわちの</sup>西漢氏が有名だが、ここでも『続日本紀』の延暦4年(785)6月10日の坂上<sup>かりたまろ</sup>菟田麻呂の上表文に、「後漢靈帝の曾孫阿智王の後なり」と中華の国の皇帝の子孫としてこじつけている。しかしこれは『古事記』中巻、應神天皇の条に阿直<sup>ふひと</sup>史の祖とする阿智<sup>きし</sup>吉師が牡馬<sup>あまの</sup>壹正・牝馬<sup>あちのおみ</sup>壹正を百濟から「貢上」したと述べ、『日本書紀』が應神天皇20年9月の条に「倭漢直の祖阿知使主とその子<sup>つかのおみ</sup>都加使主、並に己が党類17県を率いて来帰」と記述するのが本来の姿である。この「党類17県」が実数であったかどうかはともかく、この祖先伝承は後の世までも長く記憶されており、たとえば坂上菟田麻呂が宝龜3年(772)の4月20日の上表文にも「先

祖阿智使主、輕島豊明宮に馭宇天皇（應神天皇）の御世に17県の人夫を率いて帰化」と記している。そして高市郡内には「他の姓の者は、十にして一・二なり」と大和国の高市郡にはいかに同族が多く居住していたかを強調している。

それならなぜ漢<sup>あや</sup>氏を名乗ったのであろうか。「あや」の由来については、韓国慶尚南道咸安の地域<sup>かや</sup>の有力な国であった安羅とみなす説が有力である。しかし漢氏は加耶の人ばかりでなく、阿知史や阿知使主が百済から渡来しているように、漢氏は朝鮮半島南部西側の加耶・百済系とみなすのが妥当ではないかと思っている。

高句麗にかんする遺跡としては、京都府木津川市上狛の高麗寺跡が有名で、現伝仏教説話集の最古である『日本靈異記』にもみえている。『日本書紀』の欽明天皇31年（570）4月の条に高句麗の使節が北陸へきて、近江路から木津川市のあたりに入る。そこで高句麗使の迎賓館である「相楽館」などが設けられた。京都盆地におけるゆかりの史跡としては、現存最古の漢和辞書、『和名類聚抄』に八坂郷がみえ、『新撰姓氏録』の「山城国諸蕃」に八坂造が居住していたことを述べて「出自狛国人」と書いているのが参考になる。そして西京区椋原廃寺では7世紀後半のころに建立された八角塔の基壇がみつかった。八角塔は高句麗の清岩里廃寺（金剛寺）や定陵寺など高句麗に多いのが注目される。

## 2. 秦氏の活躍

高麗氏や漢氏は点的に分布しているのに対して、秦氏は北九州（大宝2年の戸籍や『豊前国風土記』逸文）から東北の出羽（久保田城漆紙文書）まで面的に居住しており、とりわけ京都盆地の開発には大きな役割を演じた。

秦氏のハタについては①機織のハタ説、②梵語の絹布説、③韓国・朝鮮語のパタ（海）説あるいはハタ（大・多）説などがある。多くの人びとは秦氏をハタ氏とよんでいるが、『古事記』では「波陀」と書き、『万葉集』巻第11の“朱引く秦もふれずて寐たれども心をけしく我がおもはなくに”（2399）と歌っているように、本来は「ハダ」とよんでいたのではないかと考えられる。大同2年（807）に齋部広成が忌部氏の伝承を中心にまとめた『古語拾遺』では、雄略朝のできごととして、秦酒公が献上した「絹・綿、肌膚に軟らかなり。故秦の字を訓みて波陀と謂ふ」と伝えている。秦の字はもとハダと読まれていた可能性がある。

それなのに秦氏をハタ氏と称してきたのは何故か。独学で朝鮮半島の古地名の研究にとりくんでこられた鮎貝房之進説では『三国史記』の「地理志」に慶尚北道のなかに「波旦」という古地名があるのに注目された。しかし『三国史記』は日本でいえば平安時代末期の成立であって、その信憑性が長く疑われてきた。1988年の3月であった。共同通信が韓

国慶尚北道蔚珍郡竹辺面鳳坪里で、甲辰年(524)の新羅古碑がみつかったことを報道した。私は早速現地に向かうことにし、当時ソウル大学の考古学主任教授であった金元龍先生と連絡をとり、蔚珍郡の郡長さんを紹介していただいた。金元龍先生は「私はまだ実見していないのに、先生は早いですね。」と苦笑いされたのを今改めて想起する。現地はソウルからかなり遠く、列車とタクシーを乗りついで、日本人では最も早く碑文を実見した。碑文には確実に「波旦」という古地名があり、「奴人法」あるいは殺牛のまつりなども記述した新羅古碑であった。この新羅古碑によってハタ氏のハタは波旦に由来することがきわめて有力となった。現在では秦氏を新羅系とみなし、朝鮮半島南部の東側を直接のふるさととすることが学界でも主流になっている。

秦氏の伝承として注目すべきものに『日本書紀』の欽明天皇即位前紀に物語られている伏見深草の秦<sup>おおつち</sup>大津父の伝承がある。馬に乗って伊勢へ旅をし、「商價(交易)」をしている富豪として描かれ、「山背国紀伊郡深草里」の人であったと伝える。欽明天皇が即位するにいたって「大蔵省<sup>つかさ</sup>」の官人になったという。この「大蔵省」の官人とは『古語拾遺』が雄略天皇の条に記す、国の財政にかかわる蔵部(貢物・出納の管理などを担当した官人)を意味すると考えられる。馬の文化は軍事や交通ばかりでなく、交易の発展とも深いつながりをもっていたことを物語るエピソードである。馬が交易に使用された例は、『日本靈異記』の中巻第24話にも檜(奈良)の磐嶋が船ばかりでなく、越前の敦賀との交易に馬を使っていた説話などからもうかがうことができる。

新羅を直接のふるさととした秦氏が居住するようになった伏見深草の地域では、発掘調査によって弥生時代中期のころから農業をいとなむ人々のくらしがはじまっていたことが明らかになっている。そして4世紀末から5世紀の段階になると、韓式土器を使った渡来の人々が宇治市のあたりに居住し、さらに伏見深草のあたりへと勢力を伸張させる。まさに深草の秦氏が馬の文化を保有していたことに言及したが、古墳時代中期のU字形刃先を接着した風呂鍬<sup>ふうろくわ</sup>の普及や畜力耕具である馬鍬の登場は、深草に本拠をもつようになった深草秦氏によってもたらされた農具の革新と考えられている(上原真人「お稲荷さんよりも昔の稲作」『朱』51号)。

伏見深草は秦氏らによって開発された豊かな土地でもあったから、朝廷ゆかりの屯倉<sup>みやげ</sup>が設けられていた。皇極天皇2年(643)11月、鹿戸皇子(聖徳太子)の嫡子山背大兄皇子が、蘇我入鹿によって斑鳩宮を包囲され窮地に落ちた時に、生駒山へ逃れた山背大兄皇子に「深草屯倉におもむき、ここより馬に乗り東国」におもむいて再起することを、三輪君<sup>みづら</sup>文屋が進言したのも、馬の文化が伏見の深草では発達していたからであろう。大阪府の寝屋川市の地域にも秦氏の勢力があつて、秦・太秦<sup>うづまさ</sup>の地名があり、5世紀後半から6世紀の

はじめにかけての太秦古墳群にそのありようが反映されているばかりでなく、馬の牧が北河内であって、実際に馬の埋葬例が数多く検出されている。伏見深草秦氏と北河内の秦氏とのつながりを軽視するわけにはいかない。伏見秦氏の勢力は6世紀に入って京都市右京区の西南部から西京区東北部の嵯峨野・嵐山方面へと勢力を拡大していったことは、大型古墳や群集墳の築造のひろがりからもうかがわれる。

秦氏を代表する知名度の高い人物としては、秦河勝がいる。『日本書紀』の推古天皇11年11月の条には、聖徳太子が諸大夫に対して「我、尊き仏像を有てり、誰か是の像を得て恭ひ拝らむ」と問われたおりに、秦河勝が進み出て「臣、拝みまつらむ」と申し、蜂岡寺を造ったことがみえている。この蜂岡寺が後の右京区太秦に所在する広隆寺である。秦氏の有力者であった秦河勝は、聖徳太子のブレンのひとりであり、「軍政人」（『上宮聖徳太子伝補闕記』）あるいは「軍允」（『聖徳太子伝暦』）としても活躍したと伝え、推古18年（610）10月の新羅使の入京の「導者」となったことが『日本書紀』にみえている。

後述するように京都盆地には多くの秦人が居住していたのでその地域に蜂岡寺を建立したというのにはそれなりの理由があるが、その蜂岡寺はいったいどこにあったのか。その有力な寺としては、発掘調査によって京都市北区北野上白梅町の北野廃寺であったと考えられている。飛鳥時代にさかのぼる遺物・遺跡がみつかったばかりでなく、「鶺鴒室」と明記された墨書土器が出土した。聖徳太子が建立した法隆寺は「斑鳩寺」とよばれ「鶺鴒寺」とも書かれていた。聖徳太子から下賜された仏像をまつる寺に、法隆寺ゆかりの「鶺鴒室」があったとしてもそれなりの説明が可能であろう。

平安時代の政治書である『政事要略』に引用されている『雑令集解』の『古記』には注目すべき記事がある。『古記』は「大宝令」の注釈書で先に述べたとおり天平10年（738）ころに書かれたものだが、治水灌漑のための大堰川がみえている。大堰川とは保津川・桂川の古い川名だが、この葛野の大堰を設けたのも秦氏であった可能性が高い。秦氏は京都における有名な社を創建している。西京区嵐山宮町に鎮座する松尾大社は平安時代末にまとめられた辞書『伊呂波字類抄』に引用されている『本朝文集』、あるいは朱雀・村上天皇の時（930～967）の行事をとりあげ、その沿革や起源を解説した『本朝月令』に引用している『秦氏本系帳』によると、大宝元年（701）に秦都理が松尾山を神体山（神奈備）とする信仰を前提に社を創建したと伝える。松尾大社と秦氏のゆかりは深く、現在は西京区松室小添町に鎮座し、松尾大社の境外攝社になっている神社に月読社がある。延喜式内社で、『続日本紀』の大宝元年4月3日の「勅」にも「葛野郡の月読神」とみえる名神大社であった。『日本書紀』の顯宗3年（487）2月の条には壱岐島で月神が阿閉臣事代に託宣して歌荒櫛田を奉ったという注目すべき記載がある。「歌」は葛野の宇太であり、「あ

らす」は「ある」の他動詞で、葛野の宇太にある土地を奉獻したという記述である。月読社の境内には太子社があって、その神像の調査をしたことがあった。高さ約50cmの小像だが、墨書があって寛保元年（1741）に後補され、秦種愷が修復したことがわかった。月読社とも秦氏がかかわりをもっていたことが判明した。

全国各地に稲荷社があるが、その總本社は伏見深草の伏見稲荷大社である。ここでもお山（稲荷山）を神奈備とする信仰を前提として社が建立される。岩波の古典文学大系本の『風土記』をはじめとして『山背（城）国風土記』逸文の「伊奈利と稱ふは、秦中家忌寸等が遠つ祖、伊侶具の秦公、稲梁を積みて富み裕き。即ち餅を用ひて的とししかば、白き鳥と化なりて飛び翔りて山の峯に居り、伊禰奈利生ひき。遂に社の名と爲しき」とあるのをそのままにして、伊侶具秦公が伊奈利の社を造営したと書いている。私はかねがね「秦公伊侶具」ではなく、吉田（卜部）兼俱の奥書のある『神名帳頭註』の逸文では「伊侶具」を「伊侶臣」としていること、秦（大西）親業の『稲荷社事実考証記』が引用している『社司伝来記』に朱書して「或ひは名、鱗に作る」とわざわざ書いていることなどから、「伊侶臣」は「伊侶巨」であって（そうでなければ、公と臣の二つの姓が重なる）。原伝は伊侶巨であって、「いろこ」は「うろこ」に通じ、その子孫の系譜には久治良・鮒主など動物類を名とする者が少なくない。したがって原名「秦伊侶巨」であったのではないかと考えてきた。それならこの秦氏がいつごろ忌寸の姓を与えられたかという点、天武天皇14年（685）6月からであって、社の創建は『社司伝来記』などによって、和銅4年（711）ということになる。

秦氏は灌漑治水につとめて、京都盆地の開発に努力したばかりでなく、たとえば蜂岡寺を造り、松尾大社や伏見稲荷大社を創建するなど、社寺の文化にも大きな功績を残した。秦氏は京都盆地ばかりでなく、木簡などによって長岡京のあたりにも居住していたことがわかり、延暦3年（784）の12月には、たとえば秦忌寸足長は宮殿を造った業績によって外正八位下から従五位上に、さらに大秦宅守が太政官院の垣を築いた功によって従七位上から従五位下に昇進というような秦氏の協力があった。秦氏の数がより多い京都盆地においてはなおさらであった。『倭名類聚抄』の葛野郡の郷の数は12であった。天長5年（828）の「葛野郡班田図」によれば耕作者として記載される人々の本貫地（本籍地）は山田郷ほか7郷で左京・右京におよんでおり、記載されている人名の総計は114人である。（ただし同一人の名が何カ所かにわたって書きこまれたり、欠損の部分がかかなりある）。この114人のなかで82名が秦氏であったことがわかる。実にその数は72パーセントであった（井上満郎『渡来人』リポート）。いかに秦氏の人びとが多かったかを察知することができる。したがって平安京の造営にたとえば秦忌寸都岐麻呂が造京工事の中心部分を担当

することにもなるのである。

しかし長岡京の造營にかかわりのあった藤原小黒麻呂が秦島麻呂の娘を妻にしていたから秦氏が長岡京の造營に密接なつながりをもったからとか、平安新京の建設に葛野には秦氏が多数居住していたからとか、秦氏の役割を過大に評価することはできない。その背後には新しいメンバーの台頭もあった。

### 3. 二つの百済王

ここで注目されるのは、『続日本紀』に記載する延暦4年(785)11月10日の条の郊祀である。郊祀は冬至の日に天帝を都の南郊の天壇でまつる中国皇帝の慣例の祭儀であり、わが国で郊祀を行った最初の天皇は桓武天皇であった。都は長岡京であったが、郊祀を行った場所は交野であった(枚方市片鉾本町のあたり)。百済の事実上の最後の王は義慈王であり、その義慈王の子である豊璋と善光(禪広)は倭国へ渡来していたが、660年唐・新羅の連合軍によって百済は滅び、百済の遺臣たちは百済の復興を願って王子豊璋の帰国を求め、豊璋は王として擁立されたが、663年の白村江の戦いで敗北し、豊璋は高句麗へ逃亡した。倭国にとどまっていた王子善光は、持統朝に百済王を名乗ることを許された。その善光の曾孫が百済王敬福で天平21年(749)の2月、陸奥守に再任していた敬福は、東大寺大仏建立のために黄金を献上した。その吉報に接した越中守大伴家持が詠んだ『万葉集』巻第18の長歌(4094)のなかに、あの有名な“海行かば”が詠みこまれている。その敬福の孫が百済王明信である。敬福が河内守であったころに建立したのが国の特別史跡百済寺(枚方市中宮)であり、その当時からの地域は百済王氏の有力な本拠地であった。日本ではじめて枚方市の交野で郊祀がなされたのは、けっして偶然ではない。桓武天皇は百済王明信を重用して、内侍所の長官(尚侍)にしたが、彼女の夫が藤原豊成の次男であった藤原継縄であった。延暦6年の11月5日にも交野で郊祀が実施されているが、同年10月17日にも交野への行幸があつて、継縄の交野の別業(別荘)が行宮となっている。延暦3年から延暦21年までの間に桓武天皇は13回も交野に行幸しており、その親密なありようを物語る。当時、継縄は大納言であったが、最後は右大臣にまで昇進している。百済王氏の出身で桓武朝廷の後宮に入内した娘は、少なくとも9名はいた。そして百済王武鏡の娘は太田親王を生み、明信の孫娘南子も伊登内親王を生んでいる。延暦9年の2月2日、桓武天皇みづからによって「百済王らは朕が外戚なり」との詔がだされたのもこうしたありようにもとづく。

1965年の6月に出版した『帰化人』に、桓武天皇の生母である高野新笠が『続日本紀』に「後の先は百済武寧王の子純陀太子より出づ」と明記されており、百済の武寧王の血脈

につながることを指摘したが、この百済王は義慈王の流れとは異なる。純陀太子のことは『三国史記』ばかりでなく、『日本書記』の継体天皇7年(513)8月27日の条にみえている。延暦8年12月28日に高野新笠夫人(後に皇太后を贈られる)は崩去し、翌年の正月14日、藤原小黒麻呂が誅言を奉ったが、その和風の諡は「天高知日子姫尊であった。重要なのは『続日本紀』のつぎの文である。「百済の遠祖都慕王は河伯(河の神)の女、日精(太陽の光)に感でて生める所なり。皇太后は即ちその後なり、因りて諡を奉る」と書いている。第1節に述べた百済(高句麗の建国の始祖と同じ)の建国神話にもとづいて「天高知日子姫尊」という諡が贈られているのである。いかに桓武朝廷が百済王の二つの史脈と深いつながりをもっていたかがわかる。

#### 4. 平安京と長安・洛陽

平安京は東西4.9km、南北5.7kmであったのに対して、長安城は東西9.7km、南北8.2kmであった。したがって平安京は長安城の面積のおよそ1/3であり、したがって長安城の朱雀大路の幅は150mであったのに、平安京の朱雀大路は約85mであった。長岡京から平安京へ都が遷ったのは、延暦13年であったが、延暦3年11月の長岡京遷都からわずか10年ばかりでなぜ遷都となったのか。延暦4年の9月、造京長官であった藤原種継が暗殺され、事件に連座した皇太弟早良親王は無実を訴えて絶食して命を絶ったという不祥事があいついだ。そればかりではない。延暦11年の8月9日には大洪水に見舞われた。しかし早良親王の怨霊への怖れや洪水などだけではなかった。和氣清麻呂が「長岡新都、十載(年)を経ていまだ功ならず。費あげてかぞふべからず」と桓武天皇に進言したことが(『日本後紀』延暦18年2月21日の条)桓武天皇の新京へ遷都を促したとみなす説が有力である。実際にその進言をうけて桓武天皇は遊獵にことよせて葛野の地を調べさせている。そして葛野の地を遊獵するさいに藤原継繩一族の別業をたびたび利用していることもみのがせない。平安新京の造宮使(長官)のひとりとは菅野眞道で、百済の貴須王の子孫でありもと津連であった菅野眞道は民部大輔(次官)であり、民部卿(民部省の長官)である和氣清麻呂の直属の部下であった。造宮判官の和氣広世は清麻呂の長男であり、また清麻呂は攝津大夫(長官)も兼ねており、住吉浜主をはじめ攝津国の関係者が多い。平安造都における和氣清麻呂の役割を軽視するわけにはいかない。

平安京は桓武朝にできあがったのではない。鴨長明が『方丈記』のなかで、「このみやこのはじめを聞ける事は嵯峨天皇の御時都と定めり」と書いているとおり遷都イコール定都ではない。延暦24年の12月7日桓武天皇が参議であった藤原緒嗣と参議に昇進していた菅野眞道に「天下の徳政」を論議せしめたおりに、緒嗣が「方今天下苦しむ所は軍事

(蝦夷征討)と造作(都づくり)なり」と答えて、眞道は異議を唱えたという(『日本後紀』)。たしかに新京の建設は、蝦夷征討の軍事力に勝るともおとらぬ大事業であった。ところで、平安京は長安城のみをモデルにして造られたのであろうか。その点については、岸俊男氏がすでに考証されているが(「平安京と洛陽・長安」『日本政治社会史研究』中、塙書房)、左京には長安城の坊名の永昌坊、崇仁坊があり、右京には永寧坊、宣義坊、光徳坊があった。そして左京には洛陽城の坊名の銅駝坊、教業坊、宣風坊、涼(淳)風坊、安衆坊、陶化坊があり、右京には銅駝坊、豊財坊、毓財坊が存在した。洛陽城の坊名の方が長安城の坊名よりも多く、長安城の坊名と洛陽城の坊名とが左京・右京とに混在していることがわかる。つまり長安城だけをモデルにしたのではなく、洛陽城も参考にしていただろうことを知る事ができよう。それならいったい何年のころからこうした長安・洛陽両城の坊名が使われるようになったのであろうか。その初見は『日本三代実録』の貞観16年(874)の8月24日の条にみえる右京の豊財坊からであって、清和天皇のころから使われるようになったことがたしかめられる。そして時代を追って唐風の坊名がつけられゆく。

長安城は東側を万年県とよび西側を長安県と称し、洛陽城では京中に流れる洛水によって南北を分け、北を洛陽県・南を河南県とよんだ。長岡京では東を東京、西を西京とよんだことが『続日本紀』の延暦3年9月5日の条によって明らかだが、平安京では左京を洛陽、右京を長安とよんだのはいつごろからであったのか。左京を洛陽と称したのにもうかがわれるように、平安京の人々が、洛陽の存在を強く意識していたこともみのがせない。もとより平安新京は造都のはじめから左京すなわち洛陽、右京すなわち長安とよんでいたわけではない。そして当初から明確にわけていたのでもない。当初は平安京を長安とよんだり、洛陽とよんだりしていたと思われる。そして10世紀の後半、岸説によれば應和3年(963)のころになると左京は洛陽、右京は長安とする理解が具体化してくる。

それならなぜ洛陽が平安京や京都の代名詞のように使われるようになるのか。それは慶滋保胤が『池亭記』のなかで、「西京の人家、漸く稀なり」と嘆き、「人は去る有りて来る無し、屋は壊るるありて造る無し」とし、「東京四條以北、<sup>いぬいうしやう</sup>乾良<sup>いぬいうしやう</sup>二方、人々貴賤無く、多く群聚する所なり」と記述しているように、西京(右京)は荒廃しはじめ、東京(左京)が繁栄しつつある状況と関係がある。『池亭記』は天元5年(982)に書かれているが、ここには右京は西京と記し、左京を東京と書いているのをみのがせない。岸説とは異なって、『類聚国史』の弘仁14年(823)10月の条からみえる「東京」・「西京」が平安京で使われており、早くも10世紀後半には右京(西京)は衰退の状況にあった。したがって西京つまり長安より、東京つまり洛陽が発展して、平安京そして京都は洛陽とよばれるようになる。こうして上洛・入洛・洛中・洛外がさかんに使われるようになるのである。

しかし中国の長安城や洛陽城と平安京のありようは、決定的な違いがある。たとえば長安城は東西9.7kmであったのに対して、平安京は東西は4.9kmであり、長安城の南北は8.2kmであったが、平安京の南北は5.7kmで、平安京は東西よりも南北の方が長い。坊のありようにも相違がある。中国の坊は坊の周囲に牆垣を築き、四方に坊門を開いていたが、長岡京でも平安京でも、各条の条間路が朱雀大路に通ずる所に坊門は設けられた。とくに注目すべきは平城京・長岡京でも平安京でも都を囲む羅城を築造しなかったことである。平城京では羅城門の両翼に築地塀があったにすぎない。奈良県大和郡山市の下三橋遺跡で九条大路の南に瓦葺きの木塀が約1kmの範囲で見つかったが、これとても到底羅城とはいえない。平安京では『延喜式』の左右京職京程式に、南辺の一部に築垣が造られたとあるが、これも羅城とよぶには価しない。

古代の東アジアと京都盆地というテーマで、東アジアとかかわりのある渡来系氏族や宮都（羅城を構築していないので、あえて都城とはいわない）の問題をとりあげてきたが、ここで改めて想起するのは、『源氏物語』の乙女の巻で、紫式部が光源氏の子息夕霧の学問のありようをめぐる述べている「才を本にしてこそ、大和魂の世に用ひらるる方を強う侍らめ」との文である。「大和魂」という用語の確実な初見だが、この「才」は漢才であり、紫式部のいう「大和魂」とは「日本人の教養や判断力」であった。古代日本は東アジアから多くのものを学んだが、科挙（官吏登用の試験）や宦官（後宮に奉仕した去勢の男子の官人）の制度は受け入れなかった。都の大学や各国々の国学で『論語』・『孝経』などの儒教の経典を学習させたが、易姓革命を力説した『孟子』は学習のテキストに入れなかった。羅城を築造しなかったのも、その例のひとつである。開かれた宮都であったといえるかもしれないが、都の住民を守る意識が稀薄であったことも否定できない。

（うえだ・まさあき＝当調査研究センター理事長・京都大学名誉教授）